

彼女は切り刻んだパイナップルを口に挟みながら母親から届いた手紙を手の中で一度くしゃくしゃにしてからもつたいなさそうにゆっくりと開いて、その手紙の内容を頭の中で音読し終わるとルームサービスでアイスクリームアソートを頼んだ。このホテルは一体どれだけの大きさなのか把握できないくらいに巨大で、ワンプロアーだけでも端から端まで見えない複雑な作りをしていたので中を歩いているだけで迷宮に迷い込んだのではないかと思わせるほどだった。等間隔に並べられたドアから漏れ出てくるテレビの音とシャワーの音とスリッパを絨毯に擦る音がかすかにきこえてくる夜の時間帯に、地下のプールに行くことも考えたがホテル内で迷子になりそうだったので大人しくクイーンサイズのベッドの中の中からだを埋めたままテレビを見ていた。暗い室内を白い光が眩しく照らし、わずかに開いたカーテンの隙間から差し込んでくるヘッドライトや信号の点滅する光と混ざり合いながら目の前を横断していく。バスルームから湿ったタオルと歯磨き粉の匂いが漂いベッドシートにゆっくりと染みこんでいった。

突然電話のベルが鳴ると室内が震動し、声の束がまとまって耳の奥に詰めこまれた。会話の断片がくっつき合い絡まって目の前に広がる。受話器の奥からきこえる声はノイズに包まれ相手のいる場所を想像する前に街中にいるのだなということがわかった。少し焦っているようにきこえたので、少しずつ会話を組み立てながら直接会って話したいことを伝え、やっとホテルのロビーで待ち合わせをする約束を取り決めてから時間まで髪の毛をワックスで整えているとノックの音が鳴った。ドアを開けると真新しい真っ白なエプロンを着けた女性が立っていて、無造作にベッドサイドテーブルに三種類のアイスクリームが乗った皿を置いて早足

でドアを開けて出ていった。彼女はカーテンを開けて窓の縁に浅く腰掛けて、眠ることなど忘れたような街の喧噪を眺めながらチヨコレートアイスにスプーンを入れた。誰も上など見ようとしないので人々の頭だけがピンボールゲームの玉みたいに転がってはぶつかって四方八方に弾かれて飛んでいく。窓に息を吐いて薄く広がる黄色と灰色が混ざった雲の上に月の絵を描いてまた消した。一着だけ持ってきていたローズ色のドレスにフェイクファーのコートを羽織ってから部屋を出てロビーに向かうとそこではカルテットの演奏が始まったばかりで、幾人かの宿泊客がまばらな拍手を送りながら座るには大きすぎるソファアールの上で時間を持てあましウエイターにドリンクを注文したりしている。しばらくチエロを弾いている男の足の動きを眺めていると、長身で薄汚れた埃っぽい服を着た男が目の前に現れ急に演奏にのって足を動かした。始めた。男の顔は目の周りがぐると落ち込んで、クマに覆われた下瞼は暗く深い影を落としていた。彼女はわざと男の顔を見ないように努めていたが、ふとした瞬間にもう一度目に入ってきた男の顔はまぎれもなく彼女が知っている顔だった。ぎらりとしたその浮き上がるような目は、彼女の中に立ち現れた記憶の中の人物像と咄嗟に一致しなかった。確かに全体を見るとそれは彼女の弟であり、ブツクサと呟くような話し方をきくと何も変わりはない。彼であることがすぐにわかるのに、一瞬とはいえ気づかなかったことが不思議でならなかった。

「久しぶり」

彼はやはりその顔からもわかるように寝不足のようでふらつく足でソファアールに体を押しつけるようにして腰掛けながら言った。彼の革靴は擦れて薄くなり足の指の形が浮き出て見えそうなくらいだった。母親からの手紙で彼が結婚して子供ができたのだということを知った。そしてその子供が男の子だということ、まだやっとなし言葉を話すようになったばかりだということも書いてあった。実際には彼女は手紙を見なくとも一字一句間違えずに何が

書いてあったか言えるくらい手紙を何度も何度も読み返していた。手紙の文章には妙な切迫感があつて昔よくきいていた母親の口調とはまったく異なつた調子の文章だつたからだ。読んでいくうちにまだ子供だつた頃の二人が目の前に現れてくるような気分になつた。それはあたたかく、しかし時に指先に刺さつた棘を抜こうとするような痛々しさもあつた。彼女はひよんなことから静養に訪れた土地のたまたま入つた巨大なホテルのバスタブで、封を開けずに鞆に詰め込んだきた手紙をむさぼるように読んでいた。

五年ぶりに会つた彼を見てうまく目を合わせる事ができずにいた。一言目をどう発すればいいのかわからないまま時間をやり過ごすためにバーに行つてお酒でも飲もうと彼を誘つた。ホテルの地下一階のバーでは土曜のためか席がほぼ埋まるほどの客が財布にたつぷりと金を用意して陽気な顔をして飲んでいた。旅行者や短期滞在者特有の、少しだけ孤独を感じながらも不思議な高揚感に包まれた表情だつた。普段感じていた時間軸や自分という殻を捨てて見たこともない景色や匂いの中に身を置くと、自身がただ一人の人間にしか過ぎないという決まりきつた安心感みたいなものを感じるせいかもしれない。皆一様に同じような表情で音楽に合わせて踊つたり酔いつぶれて恋人の肩にもたれたまま眠つていたりする。二人でウイスキーを飲みながら、だんだんと酔っぱらつていく彼の横顔をずっと眺めているうちに、いつか「家族」という名で囲われていた二人のことと、「あらゆる場所に存在している他人としての二人」のことについて考えていた。実際に、五年間の間「家族」という名前を取つたらまつた他の他人になつてしまうくらい二人は一度も連絡を取ることはなかつた。

実家から持ち出してきたビンテージのギターを売つた後で引き換えた金をそのまま財布に突っ込んでから、安い自ワインの小さいボトルを買つて公園のベンチに座つていた。友人の家に身を寄

せ、昼間は何もすることなくただただ何かに取り憑かれたように歩き回っていた。そのうちに彼は薄い粘膜の中にいるような息苦しさを感じ眠れない日々が続いていた。考えなければならぬことが多ければ多いほど何もせずに過ぎていく日々は、誰も手の届かないところに積もる埃のように厚くなり、本来の姿がよく見えなくなつてそこが一体どこだったかもわからなくしてしまう。しかし、何故か今日は気分も良く動くなら今日しかないといった不思議な気配が自身の中にあつた。こうやって座っていると彼はいつも周りにあるものの数を数える癖があつた。植木の本数を数え、足元に生えている雑草の数を数え、空を見て雲の数を数えた。そして遊具のタイヤの数を数えているうちなぜかからだがブルブルと震え始めた。買ったばかりのワインの蓋を開け飲み干すと震えは止まり、指先からわずかな温度がのど元まで上がってくる。温度が戻ってくるからだの中で得体の知れないエネルギーのようなものが充滿してくるのを感じた。そのまま立ち上がり剥がれそうな靴底を引きずつてゆつくりと歩き出した。一体自分が何を求めているのかわからずに、ただ今日何かに決着をつけなければならぬ、という強い強迫感が足をどこかに動かしている。歩いているとわずかながらその理由が頭の中に少しづつ浮かび上がってきてひとつの生き物のように目の前に現れ始めた。その瞬間急に足取りは軽くなり偶然立ち寄つたフラワーショップでポケットに手を入れて入っていた金を全部出してから息子と同じ目の色の藍色の花を使って花束を作ってもらつた。「お祝い事ですか？」ときかれたので息子の誕生日だと言うと「おめでとうございます」と言つて店主はにこやかに笑い真っ白いかすみ草を雪のように花束に散らした。花束を持ってそのまま友人の家に帰るとテレビをつけ音量を最小にしてからコーヒーを一杯入れてゆつくりと飲んだ。最後のひとくちを飲み終わってから突然目の前の光景が薄くぼんやりとしてきて部屋の中に霧がかかったように見えた。それを合図とするかのように立ち上がつてそろそろとバスルームへ向

かい湿っている床に花束を置いてから、履いているジーンズからベルトをするすると抜き取ると、シャワーカーテンのかかっているポールにくくりつけた。

友人の家の階段の下で目を覚まし身を屈めて立ち上がろうとしたが目眩を起こししばらく横になっていた。友人はただ眠っているようで上の階からはウサギの鳴き声のような寝息が細くきこえてくる。外はいよいよ冬の気配が濃くなり窓を通して骨を冷やすようなきんとした冷たさがこちらまで漂ってきて毛布を目の下まで引つ張った。ぼんやりとした頭の中でくすぐったいような途切れ途切れの笑い声がきこえ、それがかつて自分の元にあつたことを不思議な夢に包まれているかのように思い出していた。息子のことを思い出すたびに彼は自身の子供の時のことを自然に思い出す。彼はひどい癩癩持ちで子供の頃は毎日のように泣き喚いていた。夕飯のメニューが食べたいものではなかった時、
目線が合わない時、部屋の絨毯にジュースをこぼしてしまった時、何だって彼にとつては苦痛の原因になりえた。泣き喚いている間中、世界がぐらぐらと崩れ落ち、からだに何か重い液体でも入れたかのように内臓が膨らみ、呼吸は荒く速くなった。一人だけ人よりも数段階の下へ落ちたような気持ちが続く、声をあげても声は音にならずに誰もこちら側には気づかず、にちぢりになつて行ってしまうような寂しさを感じていたのを、肌の内側から湧き出るように記憶していた。しかし彼が十七歳になった年の春、癩癩は突然消滅した。まるで世界がボタンと折りたたまれて別の面が表になったような感じだった。二十五歳の時に生まれた彼の息子は、誕生したその瞬間から寝ている以外は常に泣き続けているような子供で、看護婦も医者も顔をしかめるほどだった。見事なまでに彼の子供の時と同じように癩癩を起し泣き喚くたびに、彼の妻はあたふたとしながらも困惑したままうろろとす

るばかりで表情には疲労感が広がっていた。家中に途切れなく響き渡る泣き声に近所から苦情が出るほどだった。そのような状況だったために彼が息子のことを思う時、彼自身のことを考えるのは自然なことだった。もしかしたら自分が記憶しているあの苦痛や寂しさと同じ種類の感情を息子も感じているのではないかと思うたび落ち着かず、いつかは息子にも突然世界が反転する時が来るように祈ることしかできなかった。そんなことを思ううち、いつしか反転した自身の片一方が息子の中に入ってしまったような気がして申し訳ない気持ちと安心した気持ちとが一緒になってふつふつと湧き上がってくるのだった。

息子のことを考えているうち彼はまた眠ったようだった。久しぶりに眠りについた日は引つ張られるように深い眠りに落ちる。息子が自分の手を取ると妻が血相を変えてやってきてはちんと息子の手をはたき、息子はその場にへたりこんで大声で泣き喚き周囲の人々は怪訝そうな顔で見ぬ振りをしている。妻は今にも泣き出しそうな顔で「静かにして」と噛み殺すような声で言い、その場を立ち去った。息子はさらにきーんと耳の鼓膜を刺激する声で泣き叫び、走り去る妻の後ろ姿に向かって手を伸ばす。言葉をおささないはずの息子が突然こちらを見て、「なんで？」と言った。腫れた瞼の間からうっすらと涙の筋が線を作って流れている。彼は急に怖くなり後ずさりするとまだ歩けないはずの息子が突然立ち上がり、「どうして？」と言いながらこちらに歩いてきて彼の左肩に寄りかかってきた。彼は息子の肩を抱いて引き寄せ、彼の涙を拭おうと頬を手で包み顔を見るとそれは彼自身の顔であり、ふと横を見ると妻と妻に抱かれたまだ幼い息子が冷たい視線で彼を見ていた。

二人は店内の真ん中に乱暴に置かれている大テーブルの端に並んで腰掛けていたが、しばらくして彼が背中が痛いと言い出したので壁際のソファに移動し、そのすぐ後で彼はテーブルに突っ伏

して眠り始めたので彼女は一人お酒をちびちびと飲みながら座っているしかなかった。くつきりとクマを作って朦朧として酔っぱらっている人間を起こすわけにもいかず、どれくらいそうしていたのだろうか、だいたい時間が経ったようでも一人、また一人と客が減っていき、店内の音楽も早いものからゆったりとしたものに変えられていた。そろそろ起こしてもいい頃だろうかと思ひ肩にそつと手を置こうとした瞬間、突然彼はばさりと両手を下ろし、足に瞬時に力を入れ踏ん張った姿勢で立ち上がると一息大きく息を吸った。まるでそれは赤ん坊が生まれて泣く前に初めて空気を吸う時のような呼吸だった。その後足の力を失い膝を床に強く打ち付けて倒れそうになったので慌てて彼の脇に腕を入れ支えた。

「ごめん」と一言言った後、しばらくじつと焦点を合わせているようにして一点を見つめてから「悪いけど水を貰ってくれないか」と言うので眠そうにして立っているウェイターに水を一杯頼んだ。

「最近よく息子の夢をみるんだ。それでだいたいこうやって眠ってから一、二時間すると飛び起きちゃうんだ」

彼が動く度にポケットの隙間からわずかにじゃらじゃらという小銭の音が虚しくきこえてきた。

「今日ここまで来るのも大変だったんじゃないの？」と彼女が言うとうと、たいしたことないという風に左手を振ってから「辿り着けてよかったよ」と言った。

「ねえ、このホテルいいでしょ？ 何泊かしていかない？ 地下に宮殿みたいな大きなプールもあるのよ」と彼女は大げさに手を広げて目を丸くして言った。

金色の光が点滅するやけに暗い赤い絨毯の敷かれた廊下を通過してエレベーターに乗り地下まで降りると、高い天井にどこかの城の内部にしているような大袈裟なオレンジ色の照明がぶらさがっている。プールの下から光を当てているのか青く浮き上がった

水がやわらかいゼリー状の液体のようにゆらゆら揺れて、その表面には照明の黄色い光が眩しいくらいに反射してくっきりと映っている。彼はめずらしいの着替えてすぐにプールサイドにあるデッキチェアーに横たわった。彼女は買ってきたサイドにストローを入れて一口飲んでからサイドテーブルに置くと彼の隣のチェアーに横になって目を閉じた。彼が天井を見上げながら「声がすごく響く」と言って突然大きな声でサウンドオブミュージックの「さようなら、ごきげんよう」を歌い始めた。幸い室内には二人以外に人はいないようだったので彼女は歌に合わせて小さく手拍子でリズムをつけた。

「これ、昔よく歌ったわね」

広い塩素の匂いの広がる室内に彼の解放されたかのようなエコーのかかった伸びやかな歌声が放たれ、生あたたかい空気を混ぜながらゆったりと波打たせた。

太陽も眠りについて私ももう眠る時間ね、

さようなら、ごきげんよう、

おやすみなさい、

さようなら、

さようなら、

さようなら！

歌い終わると同時に彼は水の中に勢いよく飛び込み子供のよう
に足をばたつかせた。黄色とオレンジの光の粒がしぶきと共に弾
け飛び、空中を華麗に舞い、その中心に確かに見たことのある少
年の恥ずかしそうな笑みが浮かんでいた。彼女はサンダルを脱ぎ
捨てプールに向かって走り、思い切り飛んだ。

